

異分野にこそ、新しい発想のタネがある。人材マネジメントや経営学以外の学問、企業以外の人や組織を扱った本に、学びを探る。

## 革命的なビットコインの正体に迫る

ネット上の通貨「ビットコイン」。取引所の1つ、マウントゴックスが破綻したことで、日本でもその名が知れ渡った。通貨としての信用を暗号技術で担保しているため、本書の著者の1人である西田宗千佳氏は、「ビットコインを含め、ネット上で流通するこれらの通貨を、この本では『暗号通貨』と呼んでいます」と説明する。

これに対して日本の円、米国のドルなど、従来型の通貨を、本書では「国家通貨」と呼ぶ。「暗号」と「国家」、2つの通貨の共通する点と違う点はどこだろうか。共通しているのは、どちらも「使用するみんなが、これは通貨だと信用すれば、それが通貨になる」という理屈で成り立っている点だ。

「ビットコインは電子データで、紙幣やコインとしては存在しない。だから仮想の通貨ではないか」と思う読者もいるかもしれない。だが円やドルも、電子データとして存在する額のほうが、紙幣やコインのそれよりはるかに多い。

またビットコインの発行残高は57億ドル(米ドル換算、2014年4月時点)。多くの人が通貨だと信じているからそれだけ流通しているわけで、やはり立派な通貨だとみなせる。

ただ、どのように信用を生みだしているかという点は両者で異なる。国家通貨は国家(その一部である中央銀行)が発行しているから、国家が攻撃対象になったら、攻撃から守れる力がなければ信用を維持できない。だから武力による裏付けこそが、国家通貨の基礎なのだ」と本書は指摘する。

一方、ビットコインをはじめとする暗号通貨には中央銀行はなく、最後に責任をもつ主体も存在しない。攻撃対象が存在しないから武力攻撃の心配はない。その代わりに、流通を支える暗号を破られないようにする知力が、その基礎となっている。

こうした暗号通貨が生まれた背景には、国家通貨をベースにした、クレジットカードなどの従来の決済制度には、

著者について



西田宗千佳氏

フリージャーナリスト

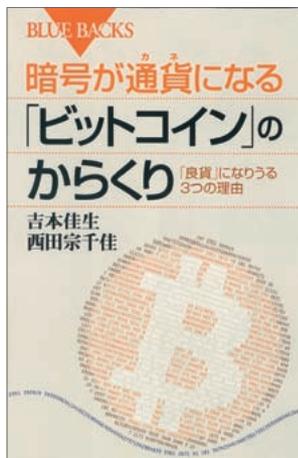
Nishida Munechika\_1971年生まれ。得意ジャンルは、パソコン・デジタルAV・家電、ネットワーク関連など「電気かデータが流れるもの全般」。著書は『iPad VS. キンドル 日本を巻き込む電子書籍戦争の舞台裏』(エンターブレイン)、『クラウド・コンピューティング ウェブ2.0の先にくるもの』(朝日新書)など。

数百円、数千円レベルの国際的な少額決済に、うまくマッチする仕組みがなかったことがある。「手数料が高額だったり、個人情報保護のリスクが大きすぎたりといった問題があります。ビットコインの決済手数料は、外国為替などと比べて非常に低く抑えられています」(西田氏)

武力に裏付けられた従来の通貨の欠点を、暗号技術という知力で打開しようとするビットコイン。「国家通貨に比べ、ビットコインはまだまだ信用の置けない未熟な仕組みだと、取材して改めて感じた」と西田氏。それでも暗号通貨は、研修などにおける思考実験の材料として、含蓄に富むという。

たとえばビットコインを、「国家がかかわらない通貨は怪しい」と見るか、「これは面白い。ビジネスチャンスかも」と見るかで、新規事業開発に向く人材か否かを見極める材料に使えるのではないかと、西田氏は話す。

世界のお金の流れに革命を起こすかもしれない暗号通貨。その目まぐるしい進化の一端を、本書を通して知ることができる。



### 『暗号が通貨になる [ビットコイン]のからくり』

著者/吉本佳生 西田宗千佳  
講談社ブルーバックス 972円(税込)  
2014年5月刊行